

## 都市に侵入する獣たち

(川道美枝子・森田哲夫・細井栄嗣・正木美佳訳/築地書館)

札幌でもエゾシカやヒグマが市街地まで出没するようになってきた。道外でもイノシシやサルが都会に出没し、昨年はツキノワグマにまちなかで襲われる被害も東北で頻発した。

本書は、このような野生生物の都市への侵入が、米国でも増大していることを詳しい資料から示し、その真の原因を明らかにする。著者は、都市の環境変化を自然と人間の双方から明らかにする自然文化地理学者だ。都市はもともと、人間だけでなく野生動物にもすみやすい場所に立地しているという分析が鮮やかだ。

特定の生き物が増えるのは、それに適した生息場所が増えるからである。19世紀までの都市の発展とともに、多くの野生生物はそこから姿を消した。20世紀後半、それが再び都市空間に侵入するようになったのは、人間がその生息場所をつくってしまったからである。生き物は、人為的な環境変化に巧みに適応し、都市にすみつくようになったにすぎない。

都市の拡大によって緑豊かな周辺地域として都市に組み込まれ、狩猟が禁止され、野生動物が保護されるようになると、都市は野生生物にとって新しい生活の場となった。放置された生ごみも、クマの侵入の誘因となった。姿を消すと思われていたシカは、郊外の畑や、増大する住宅地の庭や公園を新たな生息場所として増え続けた。都市は危険も多いが、適応さえできれば、野生生物にとって全く新しい環境となる。それは、人間も意図しなかったような「偶発的な生態系」(本書の原題)を作り出した。あるガは、工場のばい煙で黒ずんだ壁に適応し、本来、明色だった羽を目立たない暗色に変えた。都市は新しい生態系であり、そこでの生き物の進化は、きわめて早い速度で起きることが注目される。

クマやシカと、都市の住民はどうつきあえばいいのだろうか。著者は、単純な殺りくによる駆除を避け、なぜそれらが都市に出てくるのかを明らかにし、その原因を除去しつつ、共存を図るべきであると主張する。学ぶことの多い本である。

評) 小野 有五 北海道大学名誉教授

(北海道新聞(2024.05.12)読書ナビ 入稿前原稿を著者のお許しを得て公開)